

# 『Journey to the Source of the River Oxus』

John Wood LONDON JOHN MURRAY 1872

■原題 A Personal Narrative of a Journey to the SOURCE OF THE RIVER OXUS  
by the Route of the Indus, Kabul and Badakhshan

第一版 1841年は 長年絶版になっていた。

第二版 1872年は John Murray によってロンドンで再版

John Wood の生没年 1811-1861

## ■ 1872年版の G.E. Wheeler による序文

1. ウッドの3000マイルに及ぶ旅は1836年12月に始まった。
2. 上司であるバーンズは1831年ラホールまでのインダス川を調査した。
3. その目的は英国軍のアフガン侵攻の道筋をつけること。
4. ウッドの調査の名目はオクサス川の源頭を発見すること。しかし、真の目的はカーブルおよびアフガン領トルキスタンとパミール地域の部族、独立国の様子を探ることであった。
5. ウッドは測量士と航海士の資格を持ち、優れた観察眼をもっていた。
6. バーンズはブハラで1841年に殺害されたが、ウッドはこの時のイギリス政府の対応が不満で公職から退いた。
7. エルフィンストーンやバーンズなどの先人は、すでにヴァフシュ川がパンジ川と合流する地点からオクサス上流地域であると定義。ウッドがゾルクルに到達したことによって、オクサス上流部の定義としての正当性が証明された。  
また、オクサス上流部がアフガニスタン国境の北限であるという英帝国の認識が固まった。
8. 1896年、カーズンはオクサスの源頭がワフジル峠であることを証明した。

## ■ 時代背景

●パンジャブ地域—シク王国の創始と王国の繁栄 [出典ウィキペディア]

[シク王国の全盛期を築いた]

混乱が続く中、スケルチャキア・ミスルの首長にして若き指導者ラ



ランジート・シンガ

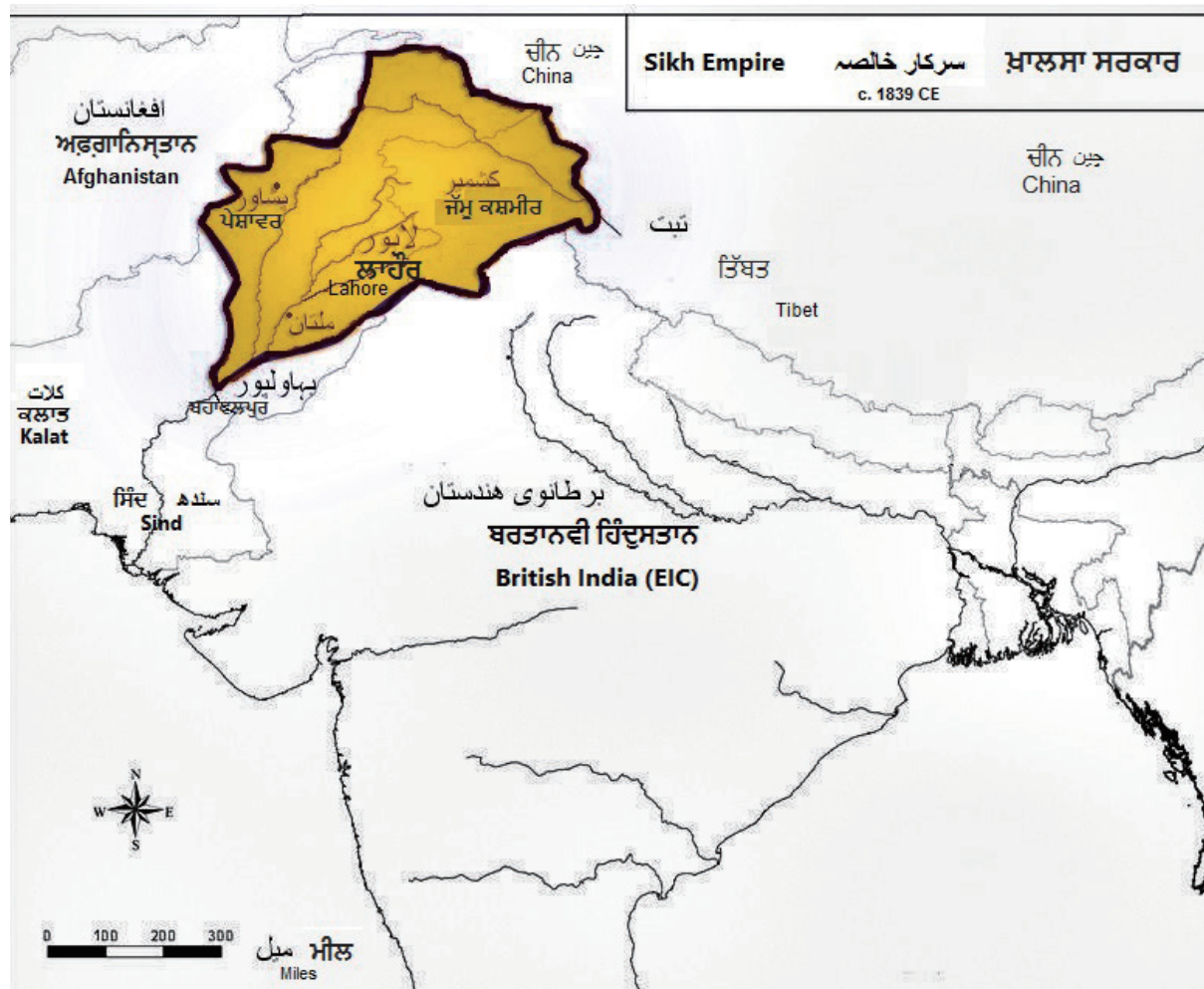
ランジート・シングはその実力を見せ、1799年7月にはアフガン勢力からラホールを取り戻した。そして、1801年4月に彼はラホールで王位を宣し、シク王国を創始した。

また、ランジート・シングは領土の拡大にも力を入れ、即位後まもなくサトレジ川以西の諸ミスルを配下に治めることに成功した。彼と対立していたサトレジ川以東のシク首長はイギリスに援助を求め、1809年4月25日にランジート・シングはイギリスにサトレジ川を越えることを禁じる不可侵条約アムリトサル条約を結ばされた。

1802年にランジート・シングは聖地アムリトサルを奪還したのをはじめ、1809年にはジャンムーを、1810年にワズィーラーバードを、1812年にインダス川流域のアトックを、1818年にムルターンを、1819年にカシミールを、1821年にはラーワルピンディーを、1834年にはペシャーワルを征服して版図とした。

これらの征服活動はランジート・シングの治世を通して行われ、その版図はパンジャブを越え、北西インド一帯にまで及んだ。征服活動で獲得した領土にはムスリムが多く、シク王国の宗教人口はムスリムが70%、シク教徒が17%、ヒンドゥー教徒が13%となっていた。ランジート・シングの宮廷には非常に優秀な人材がそろっていたという。彼はシク教徒だけでなくヒンドゥーやムスリムも平等に登用し、大臣や指揮官にはヒンドゥーやムスリムも少なくなかった。彼の右腕たる重要な宰相はムスリムのファキール・アズィーズディーンであり、財務大臣はヒンドゥーのディーワーン・ディーナ・ナートであった。

[Ranjit Singh's Sikh Empire at its peak]



### ●シク王国の後継者争い [ウィキペディア]

ランジート・シングの晩年、シク王国は北西インドにまたがる大帝国となっていた。彼は外交戦略と軍事力によってイギリスの支配を排し、19世紀においてマラーター同盟が滅亡したのちも、王国はインドで唯一の独立国としての地位を保持した。

とはいえ、ランジート・シングは王国をイギリスの植民地支配の脅威から一時的に先のぼしただけにすぎなかった。イギリスはインドの大半を植民地化しており、その脅威を根絶することは不可能であった。

1839年6月27日、ランジート・シングがラホールで死ぬと、彼の死後、王国は政治不安に陥り、深刻な後継者争いとなった。政権は目まぐるしく交代し、腐敗した指導者らが実権を握っては失脚、殺害された。

こうして、1843年9月にランジート・シングの末の息子ドゥリーブ・シングに王位が渡ったが[12]、まだ5歳の少年であり、一連の内乱で台頭したカールサーと呼ばれると強力な軍団が政権を握っていた。



[ドゥリーブ・シング]

### ●アフガン戦争について [ウィキペディアより]

第一次（1838年?-1842年）と第二次（1878年?-1881年）のアフガン戦争は19世紀に繰り広げられたグレート・ゲームの一環として、中央アジアに進出したロシア帝国がインドへと野心を伸ばしてくることを警戒したイギリスが、先手を打ってアフガニスタンに勢力圏に収めるために行った軍事行動であり、第二次アフガン戦争によってイギリスはアフガニスタンを保護国とした。アフガン戦争は狭義にはこの二度の戦争を指す。

現在のアフガニスタン国家の原型となったドゥッラーニー朝を築いたパシュトゥーン人のサドーザイ部族の王家が1818年に統一を失った後、1826年にドゥッラーニー系部族、ムハンマドザイのドースト・ムハンマド・ハーンが代わって権力を握り、バーラクザイ朝国を創始。シク王国のランジート・シングは、ドゥッラーニー朝の旧王家サドーザイ部族のシュジャー・シャーを支援し、1834年にシュジャー・シャーが最後の反撃をバーラクザイ朝に加え、敗北はしたもののランジート・シングがペシャーワルを獲得した。

1835年にドースト・ムハンマドがアミール・アル＝ムウミニーンを称してバーラクザイ朝アフガニスタン首長国を興した。

1837年、Battle of Jamrudではアフガニスタン首長国が勝利した結果、シク王国の影響力はカイバル峠までとなった。イギリスは、ロシア帝国の南下政策に対抗するためにアフガニスタン国内への軍の進駐を要求した。ドースト・ムハンマドは、これに対してペシャーワルの回復という対価を要求した。

これに対し、イギリスのインド総督である第2代オークランド男爵ジョージ・イーデンはドースト・ムハンマドの権力掌握を嫌い、シュジャー・シャーと同盟者のランジート・シングを支援して1838年にアフガニスタンに対し宣戦を布告した（シムラ宣言 ?Simlah Manifesto）。1839年1月、イギリス東インド会社軍は、クエッタからアフガニスタン領内に入ると、カンダハール（4月25日）、ガズナ、カーブル（8月7日）を次々に占領した。国王ドースト・

ムハンマドは中央アジアのブハラに亡命し、1840年には帰還して再び抵抗するもののイギリスに敗れて投降した。東インド会社軍は一旦アフガニスタンをつ平定し、シュジャー・シャー国王を復位させた。

だが、バーミヤーンでバーラクザイ朝の勢力が抵抗を続け、またアフガニスタンの各地で侵入軍に対する反乱が勃発し、1842年1月、カーブルに駐留していたイギリス軍は撤退した。カーブル撤退時の冬季の峠越えとアフガン兵の襲撃により、兵士・人夫計1万6千人が全滅し、イギリスが擁立したシュジャー・シャー国王も殺害された。

同年秋、イギリスは、報復のために再び派兵し、カーブルと周辺の村落で破壊を行ったが、この作戦を最後に戦争の継続を断念し、英領インドに捕らえられていたドースト・ムハンマドの帰国と復位が認められて、第一次アフガン戦争は終結した。

■第二版への前書き：Alexander Wood. ジョン・ウッズの息子による父親の経歴の紹介

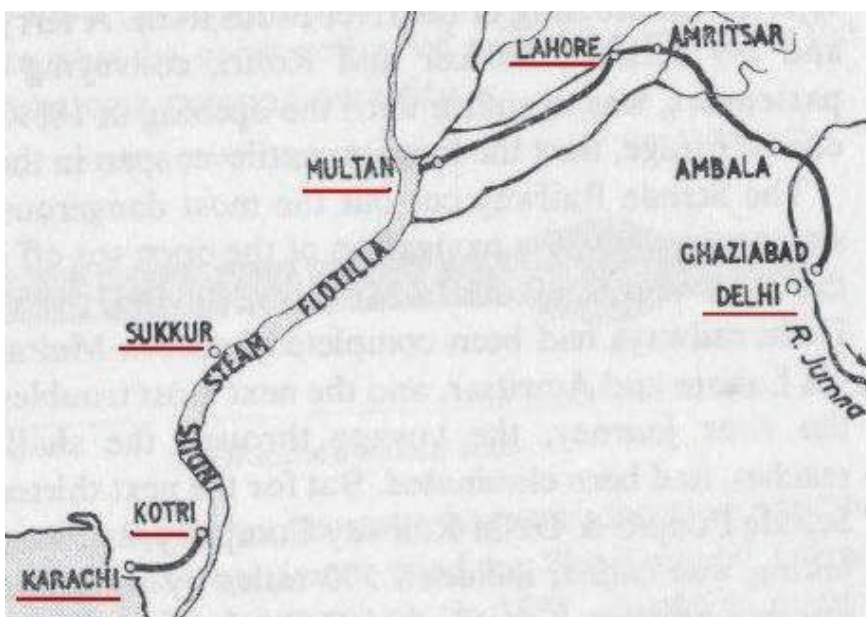
1832年大英帝国とインダス川沿いの現地行政体との間に通商条約が結ばれ、商業船によるインダス川の航行が認められた。そこで、ボンベイ出身のペルシア系商人、Aga Mahomed Rahim が蒸気船をいち早く就航させ、ウッド中尉がインド政府の承認のもと、この商業船の船長に就任した。

1835年10月31日にこの商船はインダス川の航海に乗り出した最初の蒸気機関船となった。

1836年11月、アフガニスタンの総督として任命されたAlexander Burnes からインダス川河口からアトックまでを船で調査する任務を与えられる。インダス川の川幅と深さ、水流、運河の所在地など、インダス川の包括的な測量調査を行うことであった。

その後ウッドは、英帝国のアフガニスタン政策に反対。そのため公

Indus Flotilla



職を辞職、ニュージーランに移住し、NZ Company に就職するものの、上手く行かず、ヨーロッパに戻る。

1843-49年商業にいそしむが、Sind 地方の最高司令官の Sir Charles Napier がウッドをインドに呼び戻そうとする。しかし政府の許可は得られない。この時代、シンド、パンジャブ地方では反乱が頻発していた。

公職復帰が阻まれた Wood は 1852年オーストラリアに移住。1857年、再度ヨーロッパに戻ったウッドは 1858年、Oriental Inland Steam Navigation Company のマネージャとしてインドの Kurrachee (カラチ) に赴任、この会社はしばらくして経営破綻した。

1861年 ウッドは貨物船と鉄道を包括的に運営管理していた今でいう物流会社 Indus Flotilla Company の Superintendent に就任、他界するまでこの企業で仕事を続けた。シムラに出張中体調を崩したウッドは 1861年 11月 13日に他界した。

#### ●インダス谷国有鉄道

1870年に設立。 Kotri と Multan 間を鉄道でつなぎ、蒸気船に代わる鉄道輸送網の敷設のために設立された会社。

1878年に女王橋の竣工により Sutlej 川沿いの Ferozepur と Kazur の間に延伸した。

1879年に鉄道はサッカルまで延伸、1889年にカラチ港が鉄道網とつながり蒸気船の時代は終わった。

インダス川鉄道公社はシンド、パンジャブ、デリ鉄道と合併し、1886年北西国有鉄道になった。

#### ■ヘンリー・ユール Henry Yule

(1820年5月1日-1889年12月30日) は、イギリスの軍人、旅行家、東洋学者。

#### ●略伝

スコットランドの出身。エジンバラで教育を受け 1840年からインドのベンガルで軍隊に勤務し、インドの各地を旅行した。

シク戦争 (First Anglo-Sikh War (1845?1846)、The Second Anglo-Sikh War (1848?1849)) などに従事し、1862年にイギリス陸軍大佐の階級をもって退役してヨーロッパにもどり、ドイツ・イタリア・シチリア島と移住する。

1872年には翻訳と研究により王立地理学会 (Royal Geographical Society) から金メダルを授与される [1]。1875年から亡くなるまでインド協議会 (Council of India) の会員であり、1877年にハクルート協会 (Hakluyt Society) の会長となる。

オックスフォード英語辞典の作成にさいして、特に東洋に関する記述に助言することで貢献した。

#### ●著作

\* Cathay and the Way Thither" (1866年) : 中世における東西交渉史

- \* マルコ・ポーロ『東方見聞録』の訳注（1871年）
- \* "Geography and History of the Regions on the Oxus"(1872年): オクサス川流域の歴史地理。
- \* "Hobson-Jobson"(1886年): A.C.Burnell との共著、インドにおける日常言語、歴史、地理に関する研究。
- \* The Travels of Marco Polo?by?Marco Polo

●第2版に寄せたユールの随筆（essay）

▼オクサス上流部の地理および歴史について

1. オクサスの古代名について
2. バクトリア王朝について
3. バクトリアにおける仏教
4. イスラム勢力の台頭
5. マルコポーロの記述
6. 中国とバダフシャンの交易について、ウズベク族の圧政、アフガン王朝の復権
7. アリストテレス、プトレミーの記述
8. 玄奘、中国側の記述
9. エルフィンストン、エルスキン。バーンズ、ウッズの業績
10. ウッド以降の探検の成果
11. パンディット達の貢献、ロシア側の貢献
12. M.Veniukhoff などロシア側のねつ造された論文や D. Kiepert（ドイツ人）が発表した論文がウッドの実地調査を否定する内容であったので、その記述がいかにてたらめであるかを厳しく批判。その内容を詳しく読み解いている。とくに彼らが主張していた Bolor という名前の国、町や川は西パミールには存在しないと主張。
13. パミールの定義
14. オクサス川流域の北限—ファン山脈、鉄門など。
15. オクサス川流域の南限—ヒンズクシュ山脈
16. バーミアン、クルム、バルル、オクサス平原
17. オクサスの五つの支流
18. カラテギンについて。
19. パンジ川
20. コクチャ川流域
21. スルハブ川南部
22. オクサス川に関するデータ
23. パミールの水系、湖

▼パミールに関する古代名

- Aristotle: Mountain Parnassus (一般的にはヒンズー・クシュに比定)  
冬季朝日が昇る方向にあるもっとも標高の高い山で、この山を水源とする川はインダス、バクトラス、Choaspes, Araxes
- Ptolemy: Imaus,(パミールに比定) Comedae  
The principal mountains of India (considered as a whole) were:--the eastern portion of the Paropamisus (or Hindu --Kush), the Imaus (Haimava), and the Emodus (now known by the generic name of the Himalaya.)  
See Ptolemy, Geographia, I. cap. xii. 7 sqq. By Imaus is meant the watershed range between the Oxus and the Tarim ; compare Richthofen, China, i. p. 484. (Dictionary of Greek and Roman Geography (1854) William Smith, LLD, Ed.)
- 玄奘 Comedae=Kumidha トハリストンの東に位置する。Darwaz ,Roshan に比定される。  
Stein はカラテギンに比定  
波謎羅 Pomilo Bam-i-Duniah (Roof of the World)  
葱嶺 Tsungling

#### ▼ユールのパミールに関する視点

- 1) ウッドはオクサス川の源頭の一つに到達し、パミールの台地に立った最初の（ヨーロッパ人）である。  
(He was the first to stand on the table-land of Pamir)
- 2) 最近の地理学者や旅行家はパミールの山塊は (mountain mass) はヒマラヤ山脈の延長線上にあり、したがってヒマラヤの一部であると主張しているが、この山脈は概ね東から西へと延びていることを考えると、ヒマラヤというよりも天山とはより密接な関係性があり、とくにフェドチェンコのザ・アライ山脈やキジル・アートの向きを考えればそのような主張が妥当である。Mr. Sevetzoffはこの山塊はヒマラヤと天山が合わさる場所であることから、葱嶺 Tsungling と呼ぶべきであると主張している。いずれにせよ、歴史上ヒマラヤは南北を、葱嶺は東西を分断する障壁であったことは間違いない。
- 3) 知り得る知識がどれほど断片的なものであっても、私たちは現在確信をもって言えることはこの山塊の中心は標高が高い、広大な高原によって形成されていることだ。(the core of this mountain mass forms a great elevated plateau….)
- 4) パミール高原の大部分は低い丸い丘に囲まれた、比較的平坦なステップである。  
場所によってはこのようなステップから高く聳えている山もあり、ウッドによればヴィクトリア湖の湖面から標高差3400フィートもある、海拔19,000フィートの高い山がある。
- 5) この台地、(高原)の東端にはHaywardによれば、20,000から21,000

フィートの高い峰々が聳えたっている。

- 6) Alai Steppe (草原)
- 7) テレク峠のすぐ南に楚べえる山にカシュガル川の源頭がある。東トルキスタンに流れ込む多くの川は遙か遠いパミールのステップから発している。  
(Others of the rivers that flow down into Eastern Turkestan appear to have their sources far back in the Pamir Steppe)
- 7) ウッドの旅行から20年後、パミール高原を横断したアブデュル・メフデのコーカンド使節団が出した報告書により、パミール高原に関する近況を知ることができた。
- 8) Fedchenko もパミールには高地が存在していることを確信している。  
Fedchenko speaks of his own firm belief in the real existence of the high plain of Pamir.

▼パミールスルハブ川の水系に関するユールの理解：

- 1) オクサス、Amuがカバディアンで本流として成熟するとした場合、その主たる支流は4つであり、それは北からスルハブ川、パンジャ（シュグナン、バルタン川の合流を受け）、コクチャ川、とKunduz川。シュグナン、バルタン川についてはまだ未知。
- 2) スルハブ、もしくはヴァフシュ川はカラテギンからくる川。まだこの川を見た西洋人はいない。最近まではその源頭がカラクル湖だと信じられていたが、Fedchenko によって、その水源がアライ谷のステップに位置することが解明された。
- 3) カラテギンの上流では支流のMuk川がスルハブ川に合流する。フマユーンの歴史にはすでにこの地名、川の名は知られていた。
- 4) カラテギンはアジアの中でも、もっとも未知の地域であり、闇に閉ざされた場所であり、チベットとザラフシャン川上流地域に匹敵するほどだ。
- 5) パミール・クルドから、また南ランクールから流れ出る河川はロシャンやダルワズの境界をなすバルタンでオクサスに合流する。

●参 考

- ◆ Pandit の Manphul の6つのPamirs. (1860年代?のパンジャブ貿易報告)
1. Karakul or Pamir Khargoshi,
  2. Lake of Great Pamir



3. Lake of Sarez Pamir, or Ishal Kul
4. Lake of Pamir Khurd
5. Lake of Rang-kul also in Pamir Khurd.
6. Pulong- Kul or Sassagh Kul, Yash-kul to the north of Karakul.

◆カーゾンの七つのパミール

1. Taghtumbash
2. Pamir-i-Wakhan
3. Pamir Kurd or Little Pamir
4. Pamir-i-Kalan or Great Pamir
5. Alichur Pamir
6. Sarez Pamir
7. Rang Kul Pamir
8. Khargosh Pamir which contains Great Kara Kul Lake.

カーズンは高原という言い方を否定している

G.N. カーゾン 吉沢一郎訳「シルクロードの山と谷」  
世界山岳名著全集 1 あかね書房刊 より

## 五、パミールの地貌的特質

つぎに、パミールと呼ばれている地域の地貌的特質について述べよう。パミールあるいはパミールスというものは、実体については、実をいうと英国では、非常に誤った観念が一般に流布されており、また将来も流布されようとする恐れが充分にあるのである。すなわち英国の著名なある地理学者が「茫漠たる台地」(Vast Tableland)と記述したのは、わずかに三年前のことである。また、最近の一流新聞の一流論説の中には、「暴風雪の荒れ狂う、裸出した丘陵の連続よりなる」と書かれていた。ステップ (steppe, 草原) という言葉もしばしば用いられている。

近くは一八七二年に刊行されたウッドの「オクサス水源旅行記」新版序文に書かれたユールの言葉「この山の頂辺は非常に高い台地により形成され、その大部分はほとんどが、平らな草原からなり、その間に点々と低い円い丘陵が割り込んでいる」とか、別のところでは「ある場所では、山が草原から抜きんでている」などとあるのは、いい加減な専門家の代表的な誤りである。

さて、パミール溪谷の平均高度が、三六六〇メートルないし四二七〇メートルに達し、従って周囲の地方より高所にあるということは事実であるとしても、その外形からは

少しも、台地などという観念は発生しない。わたしはそれを、山塊で囲まれ、というよりもそれが撒布されてはいるが、けっしてはつきりとバラバラにはなっていない、広い平頂地と考えたいのである。

また、丘原あるいは草原といういい方も当らない。むしろ、たいして広くない溝渠または溪谷が、河床または湖に向かって緩傾斜し、その両側には四時雪をいただく山脈が整然として連なる地域”であって、パミールに行った者は誰でも、この地方の説明としてはこういった方が正しいことをただちに認めることと思う。

事実、全パミール地域で、平原とか溪谷とかの占める面積は、全体の一〇分の一にも足りないのである。従って正確に述べようとすれば、理論上のパミールも、実際上のパミールも、平原や丘原、草原あるいは台地等ではなく、氷河作用によってできた山地溪谷 (mountain valley) であって、付近及び他の山地溪谷との相違は、その秀いでた高度のみにあり、かつ相当程度まで、その溝渠が、氷河作用による粹岩と沖積土によって満たされている、というところにある。従って外観上では平原に相当酷似しているとしても、これは中央の流れに、深い水道を掘るだけの能力がない、というところに原因があるのである。

この非掘さく性はまた、溪谷の広さと、それから来るスケールの大小を問わぬ氷河の非存在性並びに短期間の夏季——それは融雪に通じる非常に強力な浸蝕力を生むに足る劇しい日射が、十分に続かなかつたり、なかつたり——と

いうことに帰せられるのである。北部のパミール、ことにラン・クル (Rang Kul) 、タガールマ (Tagharma) ないしはアリチュール (Alichur) に近いところのものは、一般に、南方の縁辺にあるものよりも平坦で、広くひらけた場所が多い。

ところでわたしが目にしたどのパミールも、大なり小なり同じような特質をもっていた。例えば連続した雪の峰々が周囲を限り、時には氷原によってそれが縫合され、下の方は急峻な岩屑の斜面、あるいは礫岩の散らばった起伏によって終わっており、一方、溪谷の底には、河や小流れ、あるいは奔流が、礫床の上を騒がしく流れ、泥炭質の道を蛇行し、ある時は一つの、ある時は一連の湖に流れ込んでいる。

そして、この流れまたは湖の両岸には、海綿のようなやや平らな土地が拡がり、一般にはその上に粗末な黄色い草が蔽い、間にはところどころ、スコットランドの荒野のようなものゝ点在する。また、夏の間だけ緑となり百花が乱れ咲き、雪のない他の季節には黄色く凋落する草地には、その間に所々、砂粘土、石等の部分があり、また、土中に塩分がなくなっている場合には、マグネシウムの粉状皮層に蔽われ、それが陽光に、灰白の霜のごとくにギラギラと輝いている。

従ってパミールの他と異なっている主な特質は、各種の動物のための、優れた飼料となる牧草地の豊富なことで、樹木や耕作地はほとんど全くないことである。もっともパ

## ■ Journey to the Source of the Oxus 本文の内容

### ▲第一章

・1836年11月9日 ウッドはバーンズ率いるアフガン商業使節団にアシスタントとして抜擢される。

・1836年12月17日 Bander-Vikkar で川船に乗り換える。

河口付近は

マングローブが生い茂り単調な風景。

Pir Putta の聖者廟を見学。丘の上。巡礼者のために地方長官は米とギーを準備している。

That'hah 優れた織物で知られている。じめじめした不健康な場所。

Kullan Kote, Large Fort 古代の大規模な遺跡

・1月10日 That'hah 出発 インダス川の川岸は頻繁に崩落し爆音が常に聞こえる。

・1月14日 Kinjor 湖

・1月15日 Sonda。ハイエナを見る。ソンダ村から景色が変わる。Babool 林（タマリンドの木）、ミモザ

インダス川が鋭角に曲がる場所があり、岩の上に無数の長い口をしたワニを発見。

カラチではワニ園があり、温泉プールの中で飼育されている。fakirs によって飼われている。山羊を餌として与えているが、ときどき、子供が食べられることがある。

・1月18日 Hyderabad に2週間逗留。12人のバルーチ族を護衛として雇う。川沿いの広大な地域が狩猟のための動物保護区となっていた。

ウッドは前年すでにハイデラバードまでのインダス川を測量済みであった。

Lakkat 周辺は一面ジャングルである。そこでハンティングを楽しむ。

ラカットから一旦ハイデラバードに戻りインダス川の測量を再開。

### ▲第二章

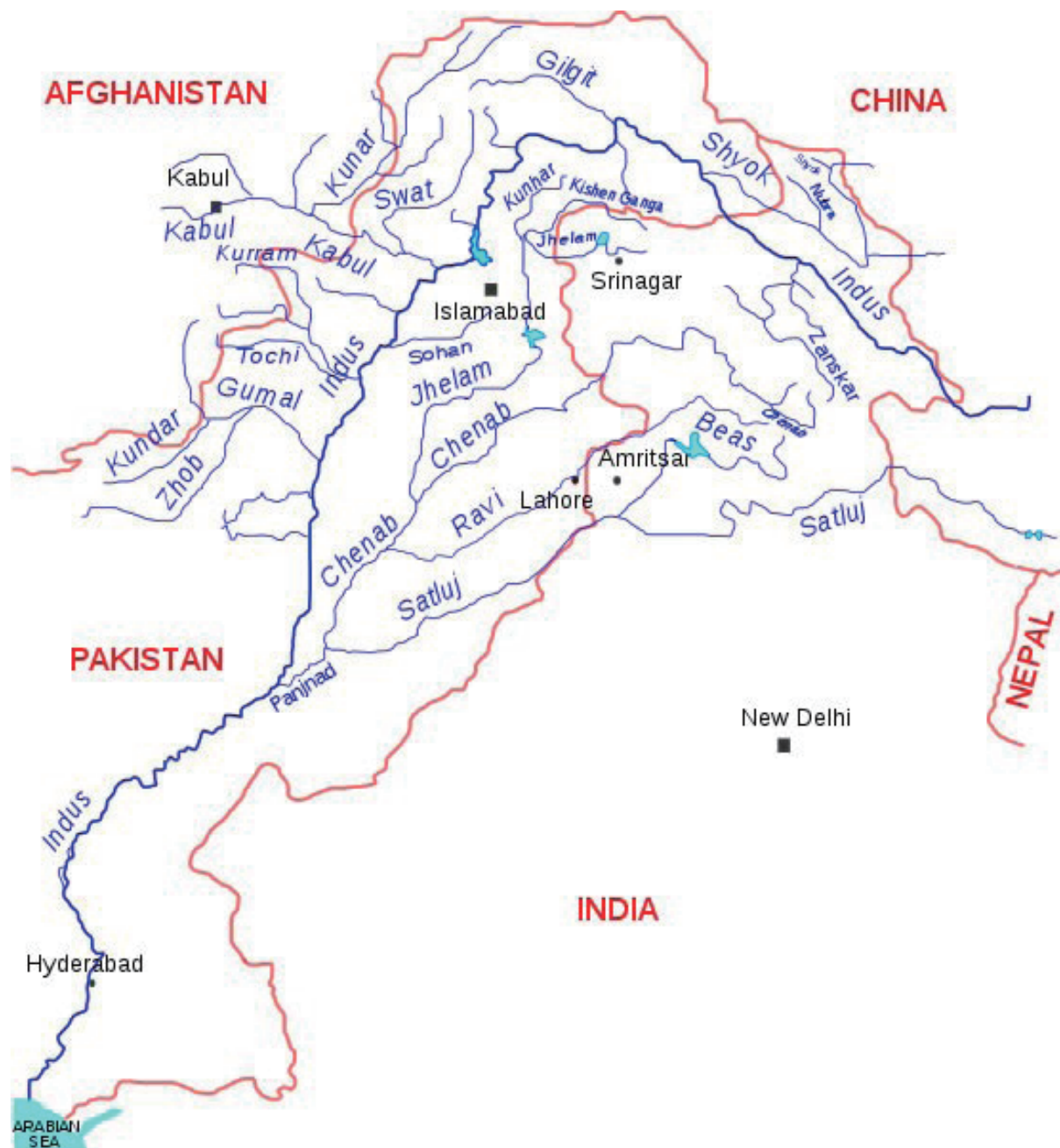
・2月21日 Halla 新市街と旧市街に分かれている。

Pir Mukdum Nu の聖者廟で有名

すぐれた土器やシンド式帽子を生産。非常に繁栄している町。塩分の強い土壌ゆえに農業の代わりに手



fakir



工芸が発達。

ホダバードの遺跡。30年前まではハイデラバードに匹敵するほどの人口があった。

- ・ 2月22日の夜、船員はラッコの群れを発見。2頭捕獲し、船に引き上げると群れが10マイルほど鳴き声を揚げながら船を追いかけてきた。

- ・ 3月3日 Sihwan, Lal Shah-baz 遺跡で有名。 .

Fakirs は優秀な園芸家である。川沿いは良く耕され今まで以上に人口が多い。

水利権は確立していて、村単位。人口台帳が付けられ、漁獲量の三分の一は政府に。

Larkhana はナツメヤシ畑が多い、水路に面している町。

- ・ 3月24日ローリ バーンズの到着を待つ。 医者の Dr. Lord と合流 .

Arore、Mulala の遺跡を見学

ムルタンの Bhawiul Huk 聖者廟に向かっている 80 人からなる fakir の集団に遭遇。

Rori は Sukkur の対岸に位置。

Sha Shujah, カーブル王はここでシンドの軍隊に 1834 勝利した。 .

### ▲第三章

Shikarpur には失望。裕福な銀行家の町。ヒンズー系商人の豪邸が目立つ。

B'hkur から Mittun-Kote までのインダス川西岸は無法地帯。 定住民を頻繁に襲う。虎の足跡多数。バッファロー [水牛] が多い。

・ 4月19日 Allah Chatchur-ke-gote 通過、通過する三日前に対岸の村から攻撃、略奪され、一人殺害された。

・ 4月29日 Mittun-Kote に到着。Ahmedpur で合流することを指示したバーンズの手紙を受け取る。

・ 4月30日 Ahmedpur 到着 Bhawul khan と謁見

バワルプール 絹織物で有名。織物職人は裕福。

・ 5月12日 バハワルプール出発。S u t l e j 川をU c h まで遡航。

・ 5月18日 Mittun-Cote までのチェナーブ川を下る。

### ▲第四章

・ 5月10日 Dhera Ghazi Khan

・ 5月22日 Runjit Sing がアトックまで航行する許可を与える。

Mittun Kote から Dhera Ghazi Khan は低い扇状地が両川岸に広がる。西にはスレイマン山脈が見える。スレイマン山はインダスと並行している。よく灌漑された農地が広がる。

東岸の住民はイスラム、ヒンドゥー、シーク族が、西岸はイスラム教徒が大多数。

・ 6月7日 北上するが雷雨にさらされる。

Dhera Ghazi Khan を出発してから数日も立たないうちに景色が一辺。30フィートの高さもある川岸に挟まれた5マイルから10マイルほどの幅がある谷をインダスが流れる。スレイマン山は西に30～60マイル遠方にある。

・ 6月13日 Dhera Din Punah 通過。1819年の大地震で壊滅的な打撃。六フィート村が陥没。浸水。

Takhti-Suliman, スレイマン山脈の最高峰が見えてきた。

### ▲第五章

・ 6月22日 Dera Ismail Khan 到着。1829の大洪水で破壊された。

・ 7月2日 Kalabagh へ向かって出発。バーンズと Dhera



Salt Range

Ismael Khan で別れる . 高い山の麓に沿って航行したが、とうとう山に行く手を遮られる。  
アフガン系住民が沿岸の村で生活。  
Kaffir Kote の遺跡 . 巨大な構造物  
Kundul で Salt Range が見えてくる。

E s a w K y l では非常に水流が早く、両岸は 30 フィート以上の高さで、常に崩落して  
いる中を船を岸から縄で曳航する。

・ 7 月 16 日 Kalabagh で Burnes と合流。

### ▲第 6 章

Kalabagh はロマンチックな町。Salt Range の峡谷にある。ここからインダスが平原に流れ  
込む。当時アルミ工場が 300 人を雇用。

水泳が人気。女性は体を露わにして泳ぐ。老若男女はみな動物の皮で出来た浮きに乗る。

船員はここからアトックまでのインダス川は航行不能であると主張。37 人の船員を雇うが  
20 km 先の Mukkud までという条件で。

・ 7 月 20 日 Karabakh 出発。 .

カラバから 7 マイル先に高い岸壁の上に建っている Ding Kot 村を通過。Mukkud 到着。 . .  
7 月 27 日まで船員の確保に苦勞。カラバ付近にいるはずの Burnes に援護を頼むため、ウッ  
ドは動物の皮でできた浮きを抱えながらインダスに飛び込むが、上手く操れなく、川岸まで  
泳ぐ。

Mukkud は Sagri Pathans 族の村。シーク王朝の支配を唯一拒んでいる。

・ 6 月 27 日 ムクドを出発。激流のため 5 マイル先の Tora Mala までしか進めない。川岸  
はまるで壁のよう。

船でアトックまで航で進むのは無理とわかり、陸路で進む。船はムクドに返す。Sagri  
Pathans は好戦的なので迂回ルートでゆく。Bundewan's の河床と Swan 川沿い。

Seikh と Pathan は対立。

・ 8 月 3 日アトックに到達。

### ▲第 7 章

・ 8 月 4 日アトックからカラバークへ川を下  
る。アトックでは Burnes が合流。

アトックから Hurru までのインダスの流れは  
緩やか。Sharki から大きな岩礁、滝、渦巻が  
行く手を阻む。

Ghora-Tarap の渦巻き。

Aug. 5th. Dubber 山を通過。Sharki 到着。インダスの流れはここからは緩やか。カラバーク  
ではインダスの川幅は 100 から 400 ヤードほど。川岸は垂直に 70 から 700 フィート  
の高さまで聳えている。岩のまわりには渦巻きが。



アトック

## ▲第8章

陸路でカラバからペシャーワルまで。

Salt range の後ろには Shukur Durah 峠。

- ・ 8月9日 Shukur Durah 村。
- ・ 8月10日ペルシャ人ガイドの Agha Maheide と一緒に Kohat に向かって出発。

コハートには硫黄鉱山とナフサがある。

石灰岩と砂岩が多い地帯である。

- ・ 8月14日鉱山を見学。

Kohat 人口2000人。イスラム、ヒンドゥー聖者廟あり。

## 第9章

・ 8月14日鉱山がある Sheikh 村。硫黄は Sheikh から12マイルに及ぶ地域で湧出している。塩、石炭、鉄鉱石にも恵まれた地域。

- ・ 8月17日ペシャーワル到着。
- ・ 8月21日ペシャーワル平原へ。ここから船でカーブル川をアトックまで下る。ペシャーワル、アトックともにシーク王朝とアフガンとの戦争の爪痕が見られる。
- ・ 8月28日 Jamrud に移動。シークの砦。カイバル峠の直下。

## ▲第10章

- ・ 9月2日カイバル峠。バーンズも同行。ジェララバードへ。カイバル峠からカーブルまでは無駄な休耕地は一つもなく、全ての土地が耕されていた。
- ・ 9月20日カーブル入り。

## ▲第11章

バーンズの目的は新しいアフガニスタンの地図を作成するための情報収集と測量。

ウッドは Karkacha 山を測量調査。頂上まで登る。Karkacha 峠8000フィート。カーブルを取り囲む山々を一望。斜面にはアーモンドの木。黒いオオカミ、キツネと豹が生息。アフガン人は賢い。

Koh Daman を見学。果樹園。Pagman ridge には貴族の館。

Koh Daman 北インドに輸出されている果物を生産。葡萄、アプリコット、桑の実、リンゴ、洋ナシ、クルミ、アーモンド。

パンジシェールの谷口まで行く。Koh Daman の測量調査中にバーンズに呼び戻され、ロード医師と同行し、トルキスタン調査を命じられる。

## ▲第12章

- ・ 10月末 クンドゥズの支配者、ウズベク系の Murad Ali Beg は眼病を患い西洋の医者による診察を求めている。ウッドはロード医師とクンドゥズまで同行する。ガイドは Mirza Buddi。クンドゥズへ行くルートは四つある。Ghorbund、Parwan、Panchshir、Hajikak 峠。



よく知られたバーミアンではなく、Parwan 峠のルートを取る。

パンジシール

- ・ 11月3日 出発。start with Dr. Lord, Mirza Buddi, and ambassador from Dost Mohamed Akhan or Murad Alig Beg of Kunduz.
- ・ 11月5日 ゴルバンド溪谷の東部の山を越え、Parwan 峠へと向かう。山は急傾斜で苦勞する。サムバラ村付近に到着。敵対的な部族に囲まれ、村の老女の説得が無ければ、殺害されていた。嫌がらせをされながらも進み、翌日峠直下でキャンプ。雪。
- ・ 10月9日 積雪、吹雪のため敗退。
- ・ 10月13日 カーブルに戻る。東部の峠からトルキスタンに入ることを諦める。

### ▲第13章

カーブルで一日休養。

- ・ 11月15日 バーミアンへ出発。Rustam Kyl というカーブルから25マイルの近郊の村で宿泊。

ウナイ峠を越える。ヘルマンド川流域の高地に。

- ・ 11月19日 Hajikak 峠へ登り始める。Kalu 村でキャンプ。Pimuri 峡谷と火山の溪谷、Zohawk 経路でバーミアンに入る。

バーミアンからは Akrobat 峠。困窮してカーブルに職をもとめて村ごと移動中のハザラ族の集団に会う。峠を越えるとタジク人の村、Sykan。多くの奴隷商人和縄で縛られている奴隷と遭遇。

Dundun Shikun 峠から Kamrud 谷

Khaji Abdullah 聖者廟

- ・ 11月28日 フルム（タシュクルガン）に到着。Mirza Buddi's の自宅歓待を受ける。その後 Mirza Buddi は殺害された。

ウッドはアフガンの方があらゆる点でウズベク族に勝ると書いている。愛国心をウズベク





[<http://www.unomaha.edu/international-studies-and-programs/center-for-afghanistan-studies/academics/transboundary-water-research/DLM3/DLM3.php>]

人は知らない。命を軽んじる。先祖の墓は大事にしない。奴隷貿易を行っている。部族への忠誠心が薄い。

フルムとクンドゥズの間横たわる平原は起伏に富んだ草地である。

・12月4日 アルチャ峠、バグランとアリアバード経由でクンドゥズに入る。

#### ▲第14章

クンドゥズの定住人口は600世帯。郊外にはウズベク人のテント村。

支配者はウズベク族の Murad Beg

2週間滞在、オクサスを調査する許可を得る。

ウズベク族の特徴。スンニ派。識字率が低い。一日2食食べる。犬を非常に尊ぶ。

ロード医師の診察。

## ▲第15章

・12月11日バダフシャンとオクサスへ向かって出発。

クンドゥズ周辺は湿地帯でインダスデルタとよく似ている。いつも霧がかっている。

葦原はインダスよりも密集していて、葦の背丈も高い。

ロード医師は同行せず、クンドゥズに逗留。

同行者は

Gholam Hussein、ヒンドゥー、コックであり、世話役。

Abdul Ghunn Yesawal、タジク

Ibrahim Sindi,

Mohamed Cassim ヒンドゥスタン、

三人のアフガン驃馬使い、

二人のアフガン馬使い。

バダフシャンは Murad Beg の支配に苦しんでいた。

Khana-a-bad、Khanabad 川の東岸に立つ町。Koh Umber 山が聳えている。クンドゥズとタリカンを隔てる分水嶺。Khana-a-bad には600軒の土の家がある。

## ▲第16章

・12月13日 Talikan は Murad Beg の息子が支配。

Hazrat Imam に次ぐ重要な都市。

人口は300から400世帯で殆どがバダフシャン人。

Latta-band 峠を越えるとバダフシャン入り。コクチャ川が足下に見える。雪に覆われている。

An-durah 峡谷を通過。

峠真下には Ak-bolak-Kila Afghan 村

ここのオオカミは大胆で、群れを成して、馬を襲う。馬の前に出て、雪を蹴り上げて、馬を脅す。

Kila Afghan は450もの泉があることで有名。

美しいメシエドの谷を通過。バダフシャン王の冬の宮廷のあった場所。

Taish Kahn (Teshkan) はバダフシャン王がウズベク支配に抗して最後まで立てこもった場所。

Khoja-Mohamed、Argu、Takht-i-Suliman and Astana 各山脈の眺望が素晴らしい。

イノシシ大群の足跡をたどる。Argu の平原に出る。1740年カシュガルのハン、ホジャがここに逃げ、バダフシャンに呪いを掛けた。バダフシャンが3回壊滅的な人口減に見舞われるようにという呪い。1800年にはクンドゥズコウハン・ベグによって、また1829年にムラド・ベグによって、破壊された。

Faizabad 500 feet。廃墟と化していた。タリカン以来、80マイルに渡って殆ど人を見かけなくなっていた。ファイザバードの住民はクンデゥズに強制移住させられていた。

当時のバダフシャンの首都は Jerm。

12月18日 Jerm に向かって出発。人口1500人。

—13℃ 宿泊拒否されるがタジク人のおもてなしを受ける。コクチャ川の左岸に位置。

### ▲第17章

Lapis Lazuli の鉱山を見学。Kokcha 谷は幅が約1マイル。地震による落石で道は遮られていた。Firgamu (Fargamu) 村は地滑り地帯の上に建つので、地震が起きたのはかなり前のこと。コヒスタンの Shar Nasr Khusrau 聖者廟。Firgamu から8マイル手前から Kaffirs の領地。カフィールによる襲撃を恐れる村人。

ラピスは石の表面に火を当て、石が柔らかくなってから、ラピス片をハンマーでたたき、削る。濃い青、明るい青、緑色。

・12月26日 峡谷を下って、Jermに到着。

### ▲第18章

・12月26日から30日まで、悪天候のため(豪雪)Jermに逗留。

・1838 元旦。ジェルムの聖職者 Ahmed Shar を訪問。1809年にヒンドウスタンから移住。彼から、パミールが標高が高く無人地帯であり、気候条件が厳しいことを聞かされる。

・1月7日頃から、地震が起こる。余震も数日続いた。Wardodj 谷で土砂崩れが起き堰止湖が出現したものの、8日後には湖が決壊し、また谷が通過可能。

Shiah-posh、黒ベストの異教徒の男が訪ねて来た。

バダフシャン唯一の鍛冶屋、イスマエル。鍋釜を作って、チトラルで売って、そのお金で蜂蜜を調達して中国で売って生計を立てていた。鉄鉱石の鉱山がカイラバード近郊の Arganjika に。ウッドは Jermy という犬を旅の道連れに。

### ▲第19章

大人っぽい、礼儀正しい子供たち。

・1月30日オクサス川が Darwaz から上流が完全に凍結したという情報を得る。ルビー鉱山見学を希望していたウッド一行はそのため Jerm に逗留していたので願ってもいない朗報である。

奴隷の売買がいかに人類に対する深い罪であるかを別れ際に村の有力者を集めて説教をする。しかし同行している Ahmed Shar は最大の奴隷商人。彼の手元には30人の奴隷が、またさらにチトラルからは100人の奴隷を調達していた。1896年のインド政庁測量局の調査によればカーブルとオクサス河に挟まれた地域では奴隷売買が盛んであった。

Jerm から9マイルのところ Wardodj River 到達。

Kaffir 異教徒の砦址。

Khosh Darow

・2月1日。インド人の召使いは寒さに耐えきれず、クンデゥズに戻る。

Bad-i-Wakhan 大風が吹く。

Yowl 村は 6600 feet. 豆は栽培できないが、小麦、くるみと果物は栽培できる。

Yowl 付近で地元出身の従者の一人が村人に毒殺される。

強風で乗馬不能に。いたるところで地震の被害。

Robat. 気温 - 30℃

Z e b a kの手前に火山の噴火活動をうかがわせるような地形。

大量の硫黄が雪に埋もれている。

・ 2月3日 Zebak 戸数は50件。

Dorah 峠からイシカシムの平野に出る。幅が5マイル。イシカシムから来た一団からパンジが凍結していないことを知る。

現タジキスタン側の山に大規模な雪崩が発生。

イシュカシムで対岸に渡るが、ルビー鉱山まで雪崩の影響で進むことが出来ない。川幅は30ヤード。

このルビー鉱山は儲からないので、ウズベク族の支配下では閉山していて、周辺住民500人は奴隷市場に売り飛ばされた。

### ▲第20章

パンジ川の左岸を進む。アブダル・ガーニが現地の住民から物資を横柄な態度で徴用するのでウッドが咎めると、アブダルはこれ以上同行することを拒否。翌日からウッド一行は食糧の確保や現地住民の協力を得ることが難しくなり、ウッドはアブダルと仕方なく和解する。Istragh（カーカーフォートの対岸）にキルギス遊牧民のユルト。最初にイシュカシム峠でヤクを見かけたので、一頭を確保し、ロード医師のためにクンドゥズに送ったが、道中衰弱し、死んでしまった。

Istragh 村でヤクに乗ってみる。ここからチトラルまでは三日間の行程である。

Kundut までの40マイルは無人地帯。

Kundut には蜂の巣のように民家が砦を囲むように立っていた。Kundut を出発してすぐに

冬のワハン。背後はアフガニスタン



20

100世帯からなるキルギス遊牧民の集団に遭遇。ヤク200頭、ヒツジ4000匹、ラクダ1000匹を連れている。クンドゥズのウズベク支配者の要請で初めてこの付近に野営したということ。ユルトの一つにムラー（聖職者）が子供たちに読み書きを教えていた。黒板にチョークで字をなぞっていた。

さらに24マイル進んでキラ・パンジャに到達。五つの岩山の上に集落。その内の一つの岩山はパンジ川からそり上がり、側面にはびっしりと民家が、そして頂上には砦。ワハンは当時、クンドゥズのウズベク人支配者、Murad Beg にたいして公然と反乱していた。Kila Panj で渡河。Issar 村（現ゾング村と思われる）山の中腹800フィートのところに温泉がある。

オクサスの谷は Issar 村で終わる。ここから谷は二つに分かれる。一方がチトラル、ギルギット、カシミールへ通じる。もう一方がパミールやヤルカンドの台地に通じる。私はオクサスの源頭にたどり着くためにはどちらの川を遡上すべきかを見極める必要があった。

キルギス人は確信をもって bam-i-duniah(世界の屋根)には(オクサス)川の源頭があるという。Sir-i-kol へ通じる道(大パミール川)へ進むべきだと。しかし、見ると Sirhad から流れる川の方が大きかった。そこで、ウッドは二つの川の水温を比較するとパミール(大パミール)から流れている川の方が5度も低く、このことからパミール川の方が標高が高いはずと判断。さらに、夏季の水量はパミールから流れてくる川の方が多いという。そこで、現在の大パミール川を遡上することにした。

イシカシムからの道のりで三つの拝火教徒の城塞跡を見た。

Sumri Kandut

Kah kah Ishtrakh

Kila Zanzibar issar=Zong

Langar Kish は Sir-i-kul へ向かう峡谷の入口にある村。

ワハンの支配者は同行を拒否。馬2頭と5人の男性従者しか提供しない。支配者はクンドゥズに向かったが到着後に殺害された。

評判の悪いキルギス人を説得、武装した5人のギルギス人が一向に加わる。ウッドのガイドとして同行。キルギス人はコーカンド藩国の領民。中国とチベットとは常に対立関係にある。略奪集団として有名。

キルギス族の領地はパミールである。スンニ派。

キルギス遊牧民は17世紀によくイスラム教に改宗。

## ▲第21章

八日分の食糧を持ってランガル・キシユを出発。

マルコポーロ・シープの角を道しるべに進む。

Khoord Pamir =小パミールへワハンの支配者からの手紙を送り届ける任務を受けたキルギ



上 マルコポーロ・シーブの角 下 氷結したゾルクル (sir-i-kol)

はオクサス河の源流が流れ出ていた。東西14 kmの長さ、幅は平均1 km。  
Sir-i-kol を取り囲む山々からはアジアの主要河川が流れ出ている。

・2月20日 600ヤードほど湖の上を歩いた。  
2.5フィートほどの深さまで氷に覆われていた。石で氷に穴を開けて湖の深さを調査。9フィートの深さと判明。水は少し悪臭がして、水草が多かった。高度障害対策としてお茶を飲み続け、脚を焚火で温めた。

マルコポーロ・シーブを2頭を撃ち止め食べたがウッドは肉がまずかったと書いている。  
パミール滞在中の高い心拍数—高度障害。ウッド110、他124から112まで。  
心が押し潰されそうになるその徹底した静粛。  
Silence reigned around-silence so profound that it oppressed the heart.  
一日でもここで過ごす文明の有難味が分かる。

ス人の集団と遭遇。川沿いは積雪なし。

気温は $-25.8^{\circ}\text{C}$  標高14,400フィートにキルギス人の夏村。これ以上進むことを従者は拒む。Sir-i-kol (ゾルクル) までは後21マイルなので、二人のキルギス人を含む少人数で残りの行程に行く。

湖の西端に着くと氷が割れて驃馬が一頭水の中に消える。

・1838年2月19日 Sir-i-kul に到着。標高15,600フィート

モンブランよりも62フィートだけ低い。回りの山は低く見える。

Sir-i-Kol は現地名。ウッドはヴィクトリア湖とは命名していない。

我々は正しく世界の屋根に立っていた。目の前には凍結した湖があり、その西端から



ゾルクル付近 背後の山はアフガニスタン

### ▲第22章

Sir-i-kul で四日間滞在。

・ 2月25日ランガール・キシに到着。

Roshan, Shugnan、Darwaz などは調査しない。

Shugnan and Roshan 15人の奴隷を毎年朝貢としてクンドゥズに送っている。シーア派

Darwaz 地方は綿花を栽培、綿を輸出し、穀物や火薬を輸入。

カラテギンは Kokand 王国と Kunduz 王国の両方に帰属。

・ 3月2日イシカシムから Wardodj 谷に入る。

すでにここは春が到来。

Kokcha 川沿いには鉱物資源が豊富。雲母、鉄鉱石、アズベストス、アンチモンなど

・ 3月5日。Kyrabad.

Abdal Ghani は地元の Jerm で結婚ここで別れる。タリカンまで美しい花々。

Akbolak 塩が豊富

・ 3月8日 Kila Afghan

・ 3月11日 19:00 Kunduz 到着。Kunduz 3か月ぶり。 .

### ▲第23章

ロード医師と Hazrat Imam まで同行。Mohamed Beg の治療のため。

Hazrat Imam でワハンの支配者が Murad Beg によって殺害されたことを知る。

・ 3月17日 オクサス川へ向かって出発。

1830年以来、100,000人のウズベク人がクンドゥズや Hazrat Iman に強制移住させられていた。湿地帯のため、気候が合わず、8年後の生存者は6000人。

「死を望むならクンドゥズに行け」と言われるほどクンドゥズは悪名高い。1837年クリャブの住民も強制移住させられ、多くが死亡。

オクサス河畔の Sha Rawan 城に到着。

Kila Chap からコクチャー川の対岸に I-Khanam という丘が見える。その頂上からは コクチャー川とオクサス川の合流地点の素晴らしい眺めが得られた。ここに Barbarrah. という古代都市があったという。ウズベク人の野営地を発見。古代の硬貨その他の出土物が無いかどうかを尋ねるが見つからない。

28マイルに渡って草原をすすみ、Turghi-i-Tippa へ。いくつもの水路を越える。

オクサスの河床にある Jan Kila から80フィートの深さもある水路跡を発見。発達した文明がなす業だと確信する。

・ 3月19日 オクサスを渡り Said 村へ。

Said はオクサスの河岸上に立つ村。葦原が広大で動物も多い。

豪雨になったので、再度コクチャー川へ戻る。

・ 3月24日 Kulm へ。

・ 4月10日 クンドゥズに戻る。

・ 4月11日 夜中に Kunduz を出発

Shorab

Nahren

Baghlan 河の源頭まで溯上。

隔絶した谷、Anderab に入る。四日間聡明な部族長と過ごす。

・ 4月18日 アンデラーブを出発。29マイル先の Khawak 峠経由で Panjishir へ。無法地帯なので、聖者を道案内人として雇う。Kawak 峠は標高 13,200 feet.(3448m)

・ 4月30日 Panjishir 出発。パンジシェールの谷の長さは 70 miles. 最も人口の多い谷。大変豊である。しかし住民は窃盗団。よく耕されている谷。タジク系民族である、スンニ派イスラム教徒。

・ 1838年5月1日 23:00 カーブル到着。

ジェララバードから動物の皮を使った浮きでペシャーワルまで川の流れに任せて移動。